■ 平成２６年１１月５日～６日　総務警察委員会県外調査（愛知県・三重県）

１　１１月５日　名古屋大学減災連携研究センター「減災館」（愛知県名古屋市千種区不老町）

【調査目的】

減災の最先端取り組みについて

【調査概要】

減災連携研究センターの概要と位置づけについて説明を受け、施設見学を実施

＜説明の概要＞

・南海トラフ巨大地震などが懸念される中、国土強靱化の流れが一気にでてきた。国土強靱化のために何よりも大切なのは、東京一極集中を避けること。ストップ少子化・地域元気戦略、国土強靱化基本計画、国土のグランドデザイン2050等で提言されている。

・名古屋大学減災連携センターは、被災の中心に位置する基幹大学として、減災社会の実現のために2010年12月に発足。当初は教員30名が兼務する形で、2012年1月に専任教員6名を配置して正式にスタートした。2012年4月には、産業界の協力により３つの寄附研究部門を設置し、産学連携研究の推進体制を整えた。

・社会連携部門と研究連携部門の2部門を核として、減災課題の研究･普及･啓発を行い、中心は、地域という立場を厳守。産・官・学・民の連携の仲人役で、必要となる、ヒトづくりとモノづくりとコトづくりの手伝いをする、地域を守るシンクタンクとしての役割を地域の中におくための場である。

・地域に愛着のある人達が、その地域で、地域の人達と一緒にモノを考える力をつけることができないと、地方創生はない。

・2012年7月に、産官学民の連携により「防災・減災カレッジ」を、2013年3月には、東海地域の6国立大学法人間で「東海圏減災研究コンソーシアム」を発足し、大学間連携を本格化。また、2013年度には、名古屋都市センター、中部地方整備局、愛知県防災局と協定、覚え書きを締結。

・2014年3月、センターの活動拠点となる減災館が完成。最先端の減災研究を実践する活動拠点としての役割に加え、名古屋大学東山キャンパス初の免震構造建物であり、災害時の対応拠点となる。平時には、減災について学ぶ場として１～２階を一般開放。

・減災館には、名古屋大学減災対策室と減災連携研究センターの二つの組織が入り、3つの役割を担っている。

①研究の拠点（実質的な減災につながる研究）

②備えの拠点（人と防災未来センターに相当する）

③災害対応の拠点（巨大災害発生時の一大拠点）

（減災館の建物概要）

建築面積：731.10㎡　延べ床面積：2,897.83㎡　規模：地上５階

構造種別：鉄筋コンクリート造、基礎免震構造

１F（学び）体感・体験の減災ギャラリー、減災ホール

２F（調べ）調べ学習の減災ライブラリー、災害対策室

３F（研究）プロジェクト室、研究室

屋上（実験施設）大振幅長周期の揺れを再現する実験施設

２　１１月６日　長島観光開発株式会社　なばなの里(三重県桑名市長島町駒江漆畑270)

【調査目的】

年間を通した誘客の取り組みについて

【調査概要】

なばなの里の運営及び取り組みについて説明を受け、施設見学・質疑応答を実施

＜説明の概要＞

・長島リゾートは今年開業50周年、なばなの里は平成10年7月オープン、17年となる。

・長島という地名はもともと「七島・ななしま」で、木曽川、揖斐川、長良川の河口付近の輪中地帯で、平成8年頃の長良川河口堰建設工事の跡地有効活用として、長島観光開発(株)が約125億円を投じて建設。

・開発に関しては、ゴルフ場等の案も出たが、当時は、高齢化社会にさしかかった時期で、緑と食事と癒やしをテーマに、高齢者にも優しい施設をということで、約20万㎡の敷地に回遊式の大庭園を造り上げた。

・園内には、ベゴニアの大温室や教会、天然温泉に露天風呂、レストラン等を併設し、「ゆっくりとくつろげる」施設とした。

・オープン当初は、年間150万人の来場者を見込んでおり、ナガシマスパーランド（遊園地）とのセット券の発売もあり、当初のターゲットであった中高年層だけでなく、夏休みには家族連れも多く見られた。

・３年目以降の定着、リピーターが課題となり、新鮮味を付加させていく必要から、コスモス、チューリップ、ダリアなどの花祭りを順次開始、平成18年にはあじさい・花しょうぶ園を、平成19年には花ひろば展望台を新設。

・なばなの里は花のテーマパークとして運営してきたが、一年中、花をテーマとした集客には無理がある。観光客の少ない冬季を華やかに光の花を咲かせるという意味で、イルミネーションを実施。

・10月下旬～3月末の5カ月間に実施。昨年の入場者は、年間240万人、内イルミネーションの来場者が180万人。

・実施当初は、31万人（66日間）の来場者だったが、光の回廊トンネルを新設した平成18年には3倍の91万人（104日間）に、平成20年からは、テーマを決めて実施し、平成25年の「祝・世界遺産富士」の演出時は約180万人（158日間）に達した。

・ここ一年で急速に外国人観光客が増加。特にアジア圏からの観光客数が伸びている。今後は、外国人の集客も視野に入れた取り組みが必要。

（施設詳細）

敷地面積：275,000㎡（ｵｰﾌﾟﾝ時は200,000㎡）　　建築面積：100,000㎡

駐 車 場：3,000台、その他臨時駐車場1,400台（無料）

総投資額：約125億円

建設期間：H9年5月～H10年7月

【質疑応答】

Ｑ：毎年イルミネーションのテーマを決めて実施されているが、デザイン料等の費用はどのくらいかかるのか。

Ａ： 当初は1億円で始めたが、現在はメーンテーマだけで、3～4億円。富士山のデザインは、世界遺産になったので急遽テーマに選んだが、通常は2年前くらいから構想に取りかかる。
Ｑ:集客のためにどのような取り組みをされているのか。
Ａ:TV、ラジオ、新聞広告による広報やWEBを活用した広報活動を展開している。また、各旅行会社と提携した取り組みを実施。営業マンに頼る時代ではなくなりつつあり、営業所も東京と大阪の2カ所に縮小している。

Ｑ：経営的には、安定しておられるのか。
Ａ： 経営的には安定している。ただし、最近はあちらこちらでイルミネーションをされており、少し恐怖に感じているところ。更なる創意工夫が必要。

Ｑ：海外に対するプロモーションはどうか。
Ａ： 現在はほとんど行っていない。ただし、ここ2～3年外国人観光客がふえてきているので、大手旅行会社との提携など、新たな取り組みを考える機会としたい。

３　１１月６日　三重県総合博物館（三重県津市一身田上津部田3060）
【調査目的】
新たな文化と知的探求の拠点
【調査概要】
設立までの検討状況及び運営状況について説明を受け、施設見学・質疑応答を実施
＜説明の概要＞
●開館までの経緯
・前身は三重県立博物館、昭和28年6月開館後、約60年の間に手狭や老朽化等の問題が発生し、過去数回、新しい博物館を建てる建てないの議論があった。
・平成3年、県議会から博物館の早期建設等についての請願が採択された。
・平成6年3月、「三重県センター博物館（仮称）基本計画」が策定されたが、平成10年3月、三重県の施策で、「ﾊｺ物」建設抑制方針が出され一旦白紙へ。
・その後も、住民、民間、県議会から新博物館建設に係る要望等が出され、平成19年2月、新博物館構想の検討が知事選挙公約にされ、7月、三重県文化審議会に「三重の文化振興方針」及び新博物館のあり方についての検討を諮問。実質的なスタートの年となる。
・翌、平成20年度に基本構想及び基本計画を策定し、平成23年に建築工事に着手、平成26年4月オープンとなった。入館者数は、平成26年10月末現在、286,112人。
●運営について
・名称の「Miemu」は、私の博物館､みんなの博物館として親しみや愛着を持っていただくため、愛称を募集し決定。「三重」の「ミュージアム」を表し、゛みえむ゛は「三重の夢」に通じ、これから先未来に向かって元気が出る博物館にしていく。
・近隣府県の滋賀県は琵琶湖、福井県は恐竜博物館というように、明確なコンテンツがあるが、新総合博物館のテーマは、三重が持つ多様性の力を掲げ取り組んでいる。自然や歴史などいろいろなものが集まってこの三重の地域の活力を生み出す。
・当館の理念は、供給者側の論理ではなく、県民･利用者の方々とともに考え、活動し、成長する博物館であり、3つの使命をもつ。
①三重の資産の保全
②人づくりへの貢献
③地域づくりへの貢献
・三重の自然と歴史、文化がわかる展示、みんなで一緒につくっていく展示、こども達を育む展示を展示の基本とする。
・基本展示では、代表される三重の特徴的な自然環境を四隅に配置、その中で育まれた、人・モノ・文化の交流史を中央で展開、人のくらしと自然の関わりを考えるコーナーをそれらの間に配置し、大空間で一体的に紹介することで、三重の自然、歴史、文化を総

合的に表現。
・企画展示では、複数のテーマによる大小の展示を組み合わせ、三重の魅力をさまざまな視点から発信できるようにしている。
・事業の展開にあたっては、県内で活動している県民、企業、団体、他の博物館等と連携。また、県内の博物館と一緒に展示事業を実施し、また、街角博物館のような個人運営の方と合同展示を実施。

（博物館概要）

敷地面積：38,120㎡　　建築面積：6,900㎡　　延床面積：10,779㎡

３階建て鉄骨鉄筋コンクリート造

１Ｆ　収蔵、管理、研究調査エリア

２Ｆ　交流展示室、交流活動室、実習室、飲食･休憩スペース、ミュージアムショップ

３Ｆ　基本展示室、企画展示室、学習交流スペース、こども体験展示室、資料閲覧室

・環境性能→太陽光発電、ハイブリッド照明、地中再熱・放熱管と地中熱利用ヒートポンプ（地中熱を利用した空調熱源システム）

・免震構造で、CASBEE（キャスビー、建築環境総合性能評価システム)のSランクを取得、三重県内では２例目、博物館としては全国初の取得。

【質疑応答】

Ｑ:総工費はどれくらいか。

Ａ:基本計画で１２０億円、決算額は１１０億。

Ｑ:年間運営費はどれくらいか。

Ａ:年間4億5千万円とし、県費負担は8割、残り2割を補助金や民間からの寄付金で賄うとされている。

Ｑ:新博物館の建設は県民からの要望か。また、総合博物館とされた理由は何か。

Ａ:前身の三重県立博物館はかなり老朽化していたこともあり、三重県文化審議会で検討を始めた経緯もあるが、県民からも平成3年に早期建設に向けての請願が県議会へ提出され採択された。また、平成10年には、住民の働きかけで、新しい博物館を考える懇話会が設置されるなど、県民の方から要望をいただき県議会と一緒につくってきた。

Ａ:今まで大きな博物館は総合といいながらも、展示室は別々であった。我々の考え方としては、多くの方が関心を持つのは、第一に自分たちの暮らしであり、そこから感じる全体の魅力であろうという立場で、自然・歴史を分けてしまうのではなく、自分の暮らしの中で自然、歴史や文化を感じることができる博物館との思いから、展示、組織についてもすべて総合的に実施することにした。

Ｑ:自然エネルギー、再生可能エネルギーシステムを導入されているが、館全体のどれくらいを賄えているのか。

Ａ:具体的な数字は持ち合わせていないが、太陽光発電については、坪、120キロワットで、パブリックスペースの照明の大部分を、また、地中熱を利用した空調熱源システムにより、収蔵物展示室の24時間空調、冷暖房は大体賄える状況である。